

特別企画：2024 年に「周年記念」を迎える栃木県内企業の実態調査

栃木県内で「周年記念」を迎える企業は 1860 社

～「創業 100 周年」は 22 社、「50 周年」は 314 社～

激動の 2023 年が暮れようとしている。「新型コロナウイルス感染症」の収束とともに社会経済活動の正常化が見られ、企業の景況感は回復基調が期待されたが、様々な構造的な理由から物価高が蔓延し、特にエネルギー価格の高止まりが企業業績を極めて厳しい環境に追い込んだ。加えて、ロシアのウクライナ侵攻は収束の気配も見せず、中東の紛争も激化。為替相場も安定せず、円安による影響も少なくない。特に中小企業はゼロゼロ融資の返済に迫られ、倒産企業の増加も目につく今日だ。まさに経済は安定期と混乱期を繰り返しながら成長を遂げているということであろう。そのようななか、脈々と息づき、荒波を乗り越える企業の存在は極めて頼もしい。今年もこのテーマでレポートを発刊できることを喜びつつ、周年企業の皆さんに心から敬意を表したい。

帝国データバンク宇都宮支店では、企業概要データベース「COSMOS 2」(栃木県内企業約 2 万 2000 社収録)のなかから、2024 年に 30、50、100 周年などの節目を迎える栃木県内の企業(「アニバーサリー企業」)を集計し(創業 10 周年以上を 10 年刻みで集計)、創業 100 周年を迎える 22 社などアニバーサリー企業 1860 社について業種別、地域別、年商規模別などに分析した。

栃木県内企業について発表するのは、今回で 11 回目。

調査結果(要旨)

1. 栃木県内企業で来年 2024 年に創業から 30、50、100 周年などの節目を迎える「アニバーサリー企業」は 1860 社。うち創業 100 周年は 22 社、50 周年は 314 社である。
2. 100 周年企業 22 社の業種別内訳では、「建設業」が 6 社でトップ、次いで「小売業」の 5 社、「製造業」「卸売業」が各 4 社と続く。50 周年では、「建設業」が 119 社と突出して多く、以下「サービス業」が 52 社、「製造業」が 47 社、「小売業」が 38 社と続いた。
3. 100 周年企業を年商規模別で見ると、「1 億円未満」が 14 社で最も多く、「1～10 億円未満」が 4 社と続く。50 周年でも、「1 億円未満」が 183 社で最も多かった。
4. 100 周年企業の地域別では、「栃木市」が 5 社で最も多く、以下「宇都宮市」が 4 社、「小山市」「那須塩原市」が各 3 社であった。50 周年では、「宇都宮市」92 社、「栃木市」「那須塩原市」が各 24 社、「足利市」22 社、「小山市」が 21 社の順であった。

主な周年記念企業

周年	商号	創業年	主な事業	本社所在地
170	村檜石灰工業 株式会社	1854年（嘉永7年）	石灰製造□	佐野市
150	株式会社 よし茶屋	1874年（明治7年）	日本料理店□	さくら市
140	株式会社 谷野善平商店	1884年（明治17年）	乾物卸□	上三川町
140	那須土木 株式会社	1884年（明治17年）	一般土木建築工事業□	大田原市
130	有限会社 目加田商店	1894年（明治27年）	酒小売□	宇都宮市
130	株式会社 渡辺和哉商店	1894年（明治27年）	米麦卸□	日光市
110	天鷹酒造 株式会社	1914年（大正3年）	清酒製造□	大田原市
100	株式会社 大正堂	1924年（大正13年）	医薬品卸	那須塩原市
100	有限会社 長江商店	1924年（大正13年）	米穀類小売□	栃木市
100	タクセル 株式会社	1924年（大正13年）	工業用樹脂製品加工□	栃木市
90	川上建設 株式会社	1934年（昭和9年）	一般土木建築工事業□	栃木市
90	晃南印刷 株式会社	1934年（昭和9年）	印刷業□	鹿沼市
70	株式会社 横田金属	1954年（昭和29年）	非鉄金属卸	栃木市
70	有限会社 ウェルシーファーム	1954年（昭和29年）	酪農業	那須町
70	佐野瓦斯 株式会社	1954年（昭和29年）	ガス供給所□	佐野市
70	株式会社 日下野商店	1954年（昭和29年）	鉄スクラップ卸□	足利市
70	サラックス製造 株式会社	1954年（昭和29年）	タオル製造□	足利市
70	有限会社 コグレコード店	1954年（昭和29年）	楽器小売□	足利市
60	イナバ塗料 株式会社	1964年（昭和39年）	塗料卸□	宇都宮市
60	株式会社 栗山山本建設	1964年（昭和39年）	一般土木建築工事業□	日光市
60	株式会社 八下田陸運	1964年（昭和39年）	一般貨物自動車運送□	宇都宮市
60	株式会社 エコアル	1964年（昭和39年）	鉄スクラップ卸□	足利市
60	トーユープラス 株式会社	1964年（昭和39年）	樹脂製品加工□	足利市
60	株式会社 野沢実業	1964年（昭和39年）	一般土木建築工事業□	宇都宮市
60	株式会社 丸和商会	1964年（昭和39年）	装飾フィルム卸	宇都宮市
60	サンケイ技研 株式会社	1964年（昭和39年）	道路反射鏡製造	小山市
50	株式会社 ダイサン	1974年（昭和49年）	印刷業□	さくら市
50	有限会社 山本鉄工所	1974年（昭和49年）	金型・同部品等製造□	足利市
50	山本コンクリート工業 株式会社	1974年（昭和49年）	生コンクリート製造□	高根沢町
50	株式会社 小山工作所	1974年（昭和49年）	鉄骨工事業□	小山市
50	コマツ栃木 株式会社	1974年（昭和49年）	建設・鉱山機械卸□	宇都宮市
50	大橋紙器印刷 株式会社	1974年（昭和49年）	段ボール箱製造□	小山市
50	株式会社 阿久津基礎	1974年（昭和49年）	土工・コンクリ工事□	宇都宮市
40	有限会社 建商菊伸	1984年（昭和59年）	セメント卸□	宇都宮市
40	株式会社 佐野屋	1984年（昭和59年）	酒類卸□	那須塩原市
40	有限会社 橋本工業所	1984年（昭和59年）	製缶板金業□	足利市
30	エムシー関東 株式会社	1994年（平成6年）	医薬品小売□	足利市
30	鹿沼ケーブルテレビ 株式会社	1994年（平成6年）	有線テレビ放送□	鹿沼市
30	株式会社 オカモト	1994年（平成6年）	情報家電機器小売□	那須塩原市
30	株式会社 ユーユーワールド	1994年（平成6年）	運輸付帯サービス	宇都宮市

1. 栃木県内で 2024 年に「周年記念を迎える企業」は 1860 社

2024年に「周年記念」を迎える企業数

周年	創業年	社数
10	2014年（平成26年）	264
20	2004年（平成16年）	274
30	1994年（平成6年）	270
40	1984年（昭和59年）	263
50	1974年（昭和49年）	314
60	1964年（昭和39年）	239
70	1954年（昭和29年）	135
80	1944年（昭和19年）	21
90	1934年（昭和9年）	26
100	1924年（大正13年）	22

周年	創業年	社数
110	1914年（大正3年）	11
120	1904年（明治37年）	7
130	1894年（明治27年）	5
140	1884年（明治17年）	3
150	1874年（明治7年）	4
170	1854年（嘉永7年）	2

2024 年に創業から 30、50、100 周年など大きな節目を迎える「アニバーサリー企業（各種法人、個人営業含む）」は栃木県内に 1860 社あることが分かった。このうち大きな節目となる創業から 100 周年を迎える企業（1924 年（大正 13 年）創業）は、(株)大正堂（那須塩原市・医薬品卸）、(有)長江商店（栃木市・米穀類小売）、タクセル（株）（栃木市・工業用樹脂製品加工）など 22 社。1924 年（大正 13 年）の出来事としては、関東大震災発生の翌年ということで、東京及び首都圏では、復旧・復興の動きが活発化する時期である。これから後の建設需要などにより、建設業界が活況となる時代でもある。俗に大正デモクラシーと呼ばれる時代の終盤にさしかかっており、政党政治が集約され加藤高明内閣が発足、普通選挙法が成立したのもこの時期だ。一方で大正ロマンと呼ばれる世相を反映して、女性の地位向上の視点からモダンガールと呼ばれる職業婦人が台頭している。また、当時の皇太子（昭和天皇）の結婚を記念して、上野公園、上野動物園が宮内庁より東京市に下賜され、関西では阪神甲子園球場が竣工したのもこの年だ。経済面では、第一次世界大戦が 1918 年（大正 7 年）に終結し、戦後復旧のなかで国内外ともに景況感が高まっている時期とも言え、建設や製造といった生産分野の業種で需要が拡大した時期とも言えるであろう。

一方で、創業 50 周年を迎える企業（1974 年（昭和 49 年）創業）では、(株)ダイサン（さくら市・印刷業）、(有)山本鉄工所（足利市・金型・同部品等製造）、山本コンクリート工業（株）（高根沢町・生コンクリート製造）、(株)小山工作所（小山市・鉄骨工事業）、コマツ栃木（株）（宇都宮市・建設・鉱山機械卸）、大橋紙器印刷（株）（小山市・段ボール箱製造）、(株)阿久津基礎（宇都宮市・土工・コンクリート工事）など 314 社。1974 年（昭和 49 年）は、時代の寵児とも呼ばれた田中角栄内閣総理大臣が、文藝春秋が掲載した立花隆氏の田中角栄研究により金脈問題が表面化、いわゆる文春の一撃により退陣したのがこの年である。しかしこれ以降も 55 年体制の安定基

盤のもと、自由民主党による政権は維持され、三木武夫、大平正芳、福田赳夫、中曽根康弘といった派閥の領袖が内閣を担当する時代が続くことになる。佐藤栄作元総理がノーベル平和賞を受賞したのもこの時期だ。経済は圧倒的な公共投資により、必然的に好調を維持していたと言える。ちなみにセブンイレブン第1号店が江東区豊洲にオープンした年でもある。スポーツ界ではミスタープロ野球・長嶋茂雄が引退し、読売ジャイアンツの連覇もこの年で終わる。芸能界では森進一の「襟裳岬」が日本レコード大賞を受賞、フィンガー5の「恋のダイヤル6700」がヒットした。映画界では、「燃えよドラゴン」や「エクソシスト」などが多くの注目を集めた。

なお、今回掲載した周年企業のなかで最も古い企業は、創業170周年を迎える村檜石灰工業(株)(佐野市・石灰製造)である。170年前の1854年(嘉永7年)は、江戸幕府第13代将軍徳川家定の時代で、この年ペリーが浦賀に来航し、その後の日米和親条約の締結につながっていく。いわゆる尊王攘夷運動が始動した時期であり、長州、薩摩、土佐などで幕末に向かって多くの人材が輩出される時代に突入していくことになる。この時代から事業が続いているという村檜石灰工業(株)、幾多の苦難を乗り越えつつ時代の波を乗り切り、現在に至る同社の企業努力に心から敬意を表したい。

2. 業種別 ～100周年企業、50周年企業ともに最多は「建設業」～

業種別

	30周年(1994年創業)		50周年(1974年創業)		70周年(1954年創業)		100周年(1924年創業)		全体社数
	社数	構成比(%)	社数	構成比(%)	社数	構成比(%)	社数	構成比(%)	
建設業	75	27.8	119	37.9	32	23.7	6	27.3	560
製造業	22	8.1	47	15.0	29	21.5	4	18.2	225
卸売業	19	7.0	25	8.0	18	13.3	4	18.2	149
小売業	28	10.4	38	12.1	18	13.3	5	22.7	228
運輸・通信業	9	3.3	9	2.9	3	2.2	0	0.0	51
サービス業	93	34.4	52	16.6	28	20.7	2	9.1	491
不動産業	21	7.8	17	5.4	3	2.2	1	4.5	102
農林水産業	0	0.0	6	1.9	1	0.7	0	0.0	24
金融・保険業	2	0.7	0	0.0	0	0.0	0	0.0	10
その他	1	0.4	1	0.3	3	2.2	0	0.0	20
合計	270	100.0	314	100.0	135	100.0	22	100.0	1,860

注: 構成比は小数点第2位を四捨五入しているため、合計は100にならないことがある

栃木県内のアニバーサリー企業を業種別で見ると、100周年では「建設業」が6社(構成比27.3%)でトップとなり、次いで「小売業」の5社(同22.7%)、「製造業」および「卸売業」の各4社(同18.2%)が続いた。創業時期の時代背景が、大正バブル時代の好景気であったことも一助となり、明治維新後富国強兵論を掲げていた日本では、重工業などの製造業や建設の需要に支えられ、この時期に様々な事業が創業され企業が芽吹き始めたものと推察できる。さらに前述したように、関東大震災の復興需要により、さらにこのあと活況を帯びることにもなるようだ。

創業70周年(1954年(昭和29年)創業)については、「建設業」が32社(構成比23.7%)で

最も多く、次いで「製造業」の 29 社（同 21.5%）、「サービス業」の 28 社（同 20.7%）、「卸売業」、「小売業」の各 18 社（同 13.3%）と続く。1954 年（昭和 29 年）という、前述したように日本民主党と自由党による 55 年体制（現・自由民主党）が成立する礎が出来た年で、吉田茂から鳩山一郎に内閣総理大臣が移行し、安定政権の胎動につながる時代と言えよう。当時最も世界で注目された女優・モデルであるマリリン・モンローが来日したのもこの年で、プロレスリングが生中継され、街頭テレビで力道山やシャープ兄弟が活躍し人気を博した時代でもある。一方で、アメリカの水爆実験により、日本のマグロ漁船「第五福竜丸」が被爆した、いわゆる「死の灰」が社会問題化した時期でもある。日本映画の黎明期にあたり、本多猪四郎の「ゴジラ」、黒澤明の「七人の侍」、木下恵介の「二十四の瞳」などの作品が次々と発表された年でもある。栃木県内企業では、(株)横田金属（栃木市・非鉄金属卸）、(有)ウェルシーファーム（那須町・酪農業）、佐野瓦斯（株）（佐野市・ガス供給所）、(株)日下野商店（足利市・鉄スクラップ卸）、サラックス製造（株）（足利市・タオル製造）、(有)コグレレコード店（足利市・楽器小売）などが創業している。

また、創業 50 周年を迎える企業では「建設業」が 119 社（構成比 37.9%）でトップであり、栃木県内の基幹産業に発達していく過程が垣間見える。次いで「サービス業」が 52 社（同 16.6%）、「製造業」の 47 社（同 15.0%）、「小売業」38 社（同 12.1%）と続いた。公共工事花盛りの時代であり、全国各地で大型の公共投資が発生、経済成長の高水準が存続していた時代だけあって、創業企業数も大幅に増加しているようだ。

因みに、30 周年（1994 年（平成 6 年）創業）の状況を見ると、時代背景はバブル崩壊後の経済混迷期のあたり、景況感低迷のなかでの経済活動となった。相変わらず建設業が 75 社（構成比 27.8%）と日本の基幹産業らしく存続企業も多いが、特筆すべきは、第 3 次産業「サービス業」が 93 社（同 34.4%）と建設を凌駕しており、様々なサービス事業が成立し、産業構造が大きく動いていることがわかる。以下、「小売業」が 28 社（同 10.4%）、「製造業」が 22 社（同 8.1%）、「不動産業」が 21 社（同 7.8%）などと続いた。政治の世界では、55 年体制にくさびを打ち込むように、細川内閣が政権を担当し、消費税の増税や小選挙区比例代表並立制の合意を進めたが、6 月には村山内閣が発足、自民党、社会党、新党さきがけによる政権奪取がなされ政局が動いた時代だ。社会問題としては、オウム真理教による「松本サリン事件」が起きたのもこのときである。スポーツ界では F1 レーサーのアイルトン・セナがサンマリノ GP で事故死したことが大きな話題となった。安達祐実主演のテレビドラマ「家なき子」が人気を集め、「同情するなら金をくれ！」が流行語となった。また、週刊少年サンデーに「名探偵コナン」が連載を開始したのもこの年だ。流行歌としては、Mr.Children の「innocent world」や、松任谷由実の「春よ、来い」、中島みゆきの「空と君のあいだに」、シャ乱 Q「シングルベッド」などがヒットした。ちなみにバブルの象徴と言われた「ジュリアナ東京」が閉店したのもこのときだ。県内企業では、エムシー関東（株）（足利市・医薬品小売）、鹿沼ケーブルテレビ（株）（鹿沼市・有線テレビ放送）、(株)オカモト（那須塩原市・情報家電機器小売）、(株)ユーユーワールド（宇都宮市・運輸付帯サービス）などが創業している。

3. 年商規模別 ～周年企業は 10 億円未満の中小企業が中心～

年商規模別

	30周年（1994年創業）		50周年（1974年創業）		70周年（1954年創業）		100周年（1924年創業）		全体社数
	社数	構成比（%）	社数	構成比（%）	社数	構成比（%）	社数	構成比（%）	
1億円未満	164	60.7	183	58.3	70	51.9	14	63.6	1,091
1～10億円未満	91	33.7	114	36.3	54	40.0	4	18.2	657
10～50億円未満	14	5.2	11	3.5	9	6.7	3	13.6	90
50～100億円未満	0	0.0	4	1.3	2	1.5	1	4.5	13
100～500億円未満	1	0.4	2	0.6	0	0.0	0	0.0	6
未詳	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	3
合計	270	100.0	314	100.0	135	100.0	22	100.0	1,860

注：構成比は小数点第2位を四捨五入しているため、合計は100にならないことがある

創業 100 周年を迎える 22 社を年商規模別に見ると、最も多かったのは「1 億円未満」で 14 社（構成比 63.6%）であった。次いで、「1～10 億円未満」で 4 社（同 18.2%）、「10～50 億円未満」が 3 社（同 13.6%）と続いた。10 億円未満の占有率が 81.8%を占め、老舗企業であっても中小企業が大半を占める実態は変わっていなかった。一方、50 周年を迎える 314 社について見ると、「1 億円未満」が 183 社（構成比 58.3%）と過半数に達しており、以下、「1～10 億円未満」が 114 社（同 36.3%）、「10～50 億円未満」が 11 社（同 3.5%）と続き、「10 億円未満」の中小企業が 94.6%にものぼる。

この傾向は他の周年記念企業でも同様の傾向を示しており、70 周年では 91.9%、30 周年でも 94.4%を占めている。老舗という経営基盤がしっかりとした大企業が中心で、中小企業は経営基盤が脆弱で長寿企業は少ないのでは・・・というイメージがあるが、統計上は事業規模に比例はしないというのが実情のようである。見方を変えれば、事業規模が小さくても経営基盤がしっかりしていれば、十分老舗企業になり得るということも言えるのだろう。

4. 地域別 ～周年企業は「宇都宮市」所在がトップ～

創業 100 周年を迎える 22 社を地域別に見ると、「栃木市」が 5 社（構成比 22.7%）でトップ、次いで「宇都宮市」が 4 社（同 18.2%）、「小山市」および「那須塩原市」が各 3 社（同 13.6%）「足利市」、「芳賀郡」が各 2 社（同 9.1%）で続いた。明治時代に廃藩置県が実行され、宇都宮県と栃木県が発足、その後合併して今の自治体区分となったため、100 年前の大正時代は県庁所在地である栃木市の繁栄が色濃く残っている時代であり、宇都宮市を上回る結果も自ずと頷ける。創業 50 周年については、「宇都宮市」92 社（構成比 29.3%）でトップ、次いで「栃木市」および「那須塩原市」の各 24 社（同 7.6%）、「足利市」の 22 社（同 7.0%）、「小山市」21 社（同 6.7%）の順となった。

現在、県下最大の市でもある宇都宮市に企業の本社が集積することも、もっともなことで、30

周年、70 周年というカテゴリーでも宇都宮市がトップのシェア率であった。また、小山市は 100 周年、70 周年といった時期ではあまり目立たないが、50 周年以降になるとその数を伸ばしており、交通の要衝という位置付けで新興都市として発展していった過程が理解できる。

周年企業が多い市郡は、歴史的な背景ともつながっているようである。前段で説明した栃木市に加えて、例えば観光業や二社一寺の門前町として栄えた日光市、繊維業で大きな発展を遂げた足利市や佐野市、林業や木工事業で栄えた鹿沼市などでは人口も比較的多く企業が集積していることも分かる。時代ごとのトレンドで起業が相次ぐといったケースも多いようだ。その後、時代の変遷とともに、県都である宇都宮市に一極集中化していくことになり、一方で県南エリアでは小山市が栃木市に代わって中心都市として企業数を伸ばすなど、周年企業の内訳という視点からも県内地域経済の栄枯盛衰が垣間見えるようだ。

市郡別

	30周年（1994年創業）		50周年（1974年創業）		70周年（1954年創業）		100周年（1924年創業）	
	社数	構成比（%）	社数	構成比（%）	社数	構成比（%）	社数	構成比（%）
宇都宮市	92	34.1	92	29.3	32	23.7	4	18.2
足利市	15	5.6	22	7.0	15	11.1	2	9.1
栃木市	23	8.5	24	7.6	10	7.4	5	22.7
佐野市	19	7.0	15	4.8	8	5.9	1	4.5
鹿沼市	19	7.0	20	6.4	7	5.2	0	0.0
日光市	8	3.0	14	4.5	17	12.6	0	0.0
小山市	19	7.0	21	6.7	7	5.2	3	13.6
真岡市	9	3.3	16	5.1	3	2.2	0	0.0
大田原市	9	3.3	7	2.2	2	1.5	1	4.5
矢板市	4	1.5	5	1.6	3	2.2	0	0.0
那須塩原市	20	7.4	24	7.6	11	8.1	3	13.6
さくら市	4	1.5	5	1.6	2	1.5	0	0.0
那須烏山市	3	1.1	6	1.9	2	1.5	0	0.0
下野市	6	2.2	5	1.6	3	2.2	0	0.0
河内郡	5	1.9	4	1.3	3	2.2	0	0.0
芳賀郡	3	1.1	12	3.8	3	2.2	2	9.1
下都賀郡	2	0.7	11	3.5	2	1.5	0	0.0
塩谷郡	7	2.6	5	1.6	1	0.7	0	0.0
那須郡	3	1.1	6	1.9	4	3.0	1	4.5
合計	270	100.0	314	100.0	135	100.0	22	100.0

5. まとめ

来年 2024 年に創業からの節目を迎える企業は栃木県内で 1860 社を数える。今回の調査・分析では 10 年刻みで集計しているが、5 年刻みで創業を祝うケースも少なくないことから、実際にはさらに多くの企業が 2024 年に一つの節目を迎えることになる。なかでも 100 周年を迎える企業は 22 社、50 周年を迎える企業は 314 社と、多くの企業が記念すべき節目を迎える。

また分析によれば、周年企業の多くが年商 10 億円未満の中小企業であり、歴史を重ねる企業は大企業ばかりではなく、むしろ事業規模が小さくても強固な経営基盤を維持している企業が生き残っている事実も確認できた。また、地域別では県都・宇都宮市が構成比では最も高く、時代の変遷によって各市郡の栄枯盛衰も垣間見ることが出来た。

弊社が 12 月 8 日にリリースした「栃木県の老舗企業分析 (2023 年)」のなかでも触れたのだが、長年事業を継続できる秘訣は何だろう・・・という問いに企業経営者が語った最も多い答えは、「変化」に強いことで、異口同音だが「変化に順応できる」ということがあげられた。どれだけ画期的なビジネスモデルも、大ヒットした商材も 30 年経過すれば、その多くは陳腐化するものである。まして、流れの速い現代社会において、その傾向は顕著だ。企業の寿命が 30 年と言われる所以なのかもしれない。時代に合わなくなった商材やビジネス手法を如何に変化させて次の時代に合わせていくか・・・この答えが見つかっている企業が老舗として存続しているのだろう。

2024 年は辰年である。一般的に「昇り竜」になぞらえて躍進の年になると言われ、転機や激動といったキーワードが結びつく年回りのようだ。周年記念をきっかけに、企業がブランド価値の向上や新たなビジネスモデルに挑む姿もよく見られることだ。中小企業を取り巻く厳しい環境のなかで、次の時代を模索する多くの企業が、2024 年を迎えるにあたり、更なる躍進を遂げることと県内経済の大いなる発展を祈念してやまない。

【 内容に関する問い合わせ先 】

(株) 帝国データバンク宇都宮支店 情報担当： 古川哲也

TEL 028-636-0222 FAX 028-633-5639

当レポートの著作権は株式会社帝国データバンクに帰属します。

当レポートはプレスリリース用資料として作成しております。報道目的以外の利用につきましては、著作権法の範囲内でご利用いただき、私的利用を超えた複製および転載を固く禁じます。